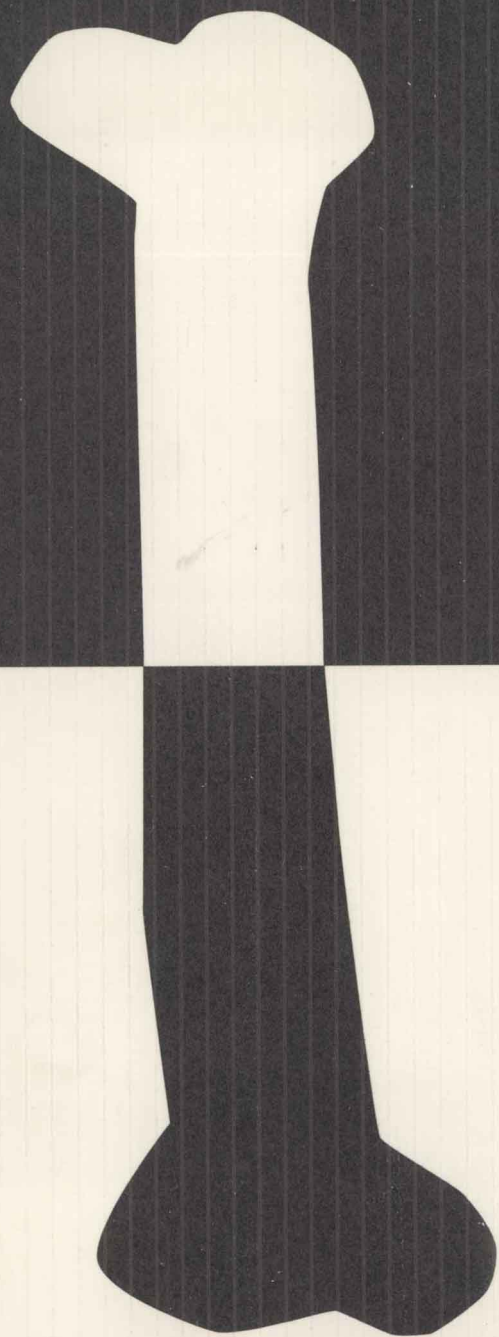
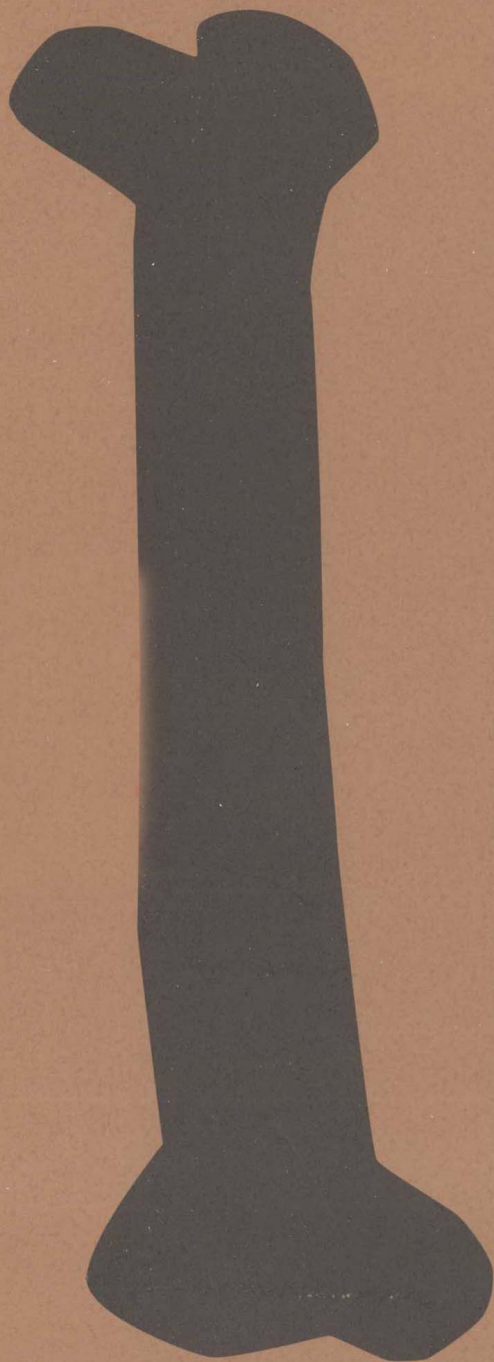


北京原人の日



鯨
統
一
郎

原人の日
鯨統一郎



講談社

べ キンげんじん ひ
北京原人の日

© Tōichirō Kujira 2001 Printed in Japan

第1刷発行 2001年1月16日

著者 くじらとういちろう
鯨 統一郎

装幀 坂川事務所

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社 〒112-8001 東京都文京区音羽 2-12-21

電話 出版部 03-5395-3505/販売部 03-5395-3622/製作部 03-5395-3615

印刷所 信毎書籍印刷株式会社 製本所 黒柳製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

落丁本、乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは

文芸局文芸図書第二出版部宛にお願いいたします。

本書の無断複写（コピー）は著作権法上の例外を除き禁じられています。

ISBN4-06-210464-4（文2）N.D.C. 913 282p 20cm

¥1500-

北京原人の日

あなたになら、これまでだれにも打ち明けられなかったことを、なにかもお話できそうです。

—— アンネ・フランク『アンネの日記』より

空から人が降ってくるのが見えた。

真つ青な空に、一点、泳ぐように人が落ちてくる。

山本達也はバイクに乗ったままグローブを外し放り投げた。

ウエストバッグを開き、デジタルカメラを取り出す。ヘルメットのフェイスカバーを撥ね上げる。十二月の寒風が顔を打つ。その間、約一秒。

両手で構えてファインダーを覗き込む。バイクは両足で挟んで押さえ込む。

ファインダーは落下途中の人間を捉えた。

(どうして空から人間が降ってくるんだ)
空中の人物の目を達也は見た。

老人だ。老人は口を歪めている。

(軍服?)

老人はカーキ色の軍服を着ていた。

達也はシャッターを押した。連写する。

巨大な影が左方向から達也に迫った。落下する老人に気を取られて交差点の中央まで進んでいた。達也はデジカメを顔から離して影の正体を確かめようとする。

すでに空中の人間は地面に激突しているだろう。だが達也がその光景を見る前に、交差点の左方向から巨大な直進車が達也に襲いかかった。

達也はデジカメを捨ててハンドルを握った。

巨大な直進車は最大積載量二トンを超えると思われる大型トラックだった。

トラックの直前で急停車するためにハンドルを左に切り、車体の向きを変える。車体はスリップを起こし、半回転した。

トラックは急ブレーキをかけながらも容赦なく達也に襲いかかる。

達也のバイクが横滑りする。

三越デパートの壁にへ二十一世紀まであと三十日〆の電光文字が見える。

十二月二日。

(もう少しで避けられる)

迫るトラックを見ながら達也はそう思った。

トラックの鼻先を、バイクはうまくかわした。

(避けられた)

バイクの後部をトラックがかすめた。

バイクは転倒した。

達也は道路に放り出された。頭をアスファルトに打ちつける。ヘルメットが弾き飛ばされる。

達也は咄嗟に頭を両手で押さえる。体が何回も回転する。しばらくしてうつ伏せに止まった達也の目に、まだ回転を続けるバイクが見えた。カワサキのゼファ1750。

旅行会社のツアー用らしき大型バスが大きな排気音をあげて達也に向かって迫ってくる。達也は目を瞑つた。

(もう避けられない)

大型バスのエンジン音が轟く。

達也はバスに轢かれた。

意識を失ったような気がした。

達也は目を開けた。車が次々に急ブレーキをかけている。

倒れたまま後ろを振り向いた。体の半分はバスに隠れている。車体の下の隙間を通り抜けたらしい。

両の手のひらを見た。

左右とも外側の半分が、すりむけて血だらけになっている。

気がつくと前方に、さまざまな小物が飛び散っている。おそらく達也のカメラバッグから放り出された荷物。

サンダラス、ガムテープ、フィルム、ボールペン、マジックインキ、手帳、懐中電灯、電池、コンパクトカメラ、脳漿……。

達也は車体から這い出して自分の荷物を拾い集めてウエストバッグに押し込む。

(なんだこれは)

買ったばかりの来年用の手帳がぼろぼろになっている。

かまわずぼろぼろの手帳をバッグに放り込んだ。
粉々に砕けた物体はデジタルカメラのようだ。

(最悪だ……)

達也はデジカメをあきらめ自分のバイクを探す。

交差点の中央にバイクが転がっていた。その横に人が倒れている。

頭を中心に脳漿が放射状に道路に撒^まかれていた。

軍服を着ている。その軍服の下から夥^{おびただ}しい量の血が流れ出ている。

達也はその人間に向かって足を踏みだした。だが、右足に激痛が走り足を止めた。

膝^{ひざ}をアスファルトにつく。動けない。

空を見上げて嘆息した。ヘリコプターが飛び去るのが見える。

急停車した車から人が降りだして軍服の人物の周りに集まり始めた。

達也はウェストバッグからもう一台のカメラ、コンパクトカメラを取りだして被写体に向けた。倒れている軍服の人物。

(しかしこの男は、どうして空から降ってきたん

だ?)

ふたたびそう思ったが答えは見つからない。
シャッターを押そうとするが、なかなか指に力が入らなかった。

*

会社のドアを開けると受付カウンターに坐っている若い女性が口を開けたまま達也を見つめた。

「山本です」

達也が自己紹介をしても女性は驚愕^{きょうがく}から醒^さめやらずにいる。セーラー服を着せてそのまま渋谷を歩かせても違和感を抱かせない顔つきの女性だ。

(この女は一日で落とせるな)

達也は瞬時にそう思いながら「今日から『原点』の専属カメラマンとして勤務することになりました」と言った。

ドア付近に人が集まってきた。

「どうしたんだ、君」

メガネをかけた小柄な男が達也に訊いた。

「すいません。遅刻しまして」

「血だらけじゃないか」

「いま、空から落ちてきて」

「空から？ 君がか」

「オレ、いや、僕じゃありません。軍服の男が空から降ってきたんですよ」

受付嬢らしき女性が今度は脅えた顔をする。メガネの男も訝しげに達也を見る。

「いや、本当ですよ。それで、救急車が来て男は運ばれました。いま、警察も来てますよ」

「どうした」

奥から胸間声どうまごえがした。

五十年輩の男が顔を見せる。

「社長」

社員たちが男を見て呟くつぶやように言う。

社長と呼ばれた男は大柄で、黒縁のメガネをかけていた。頭は丸く、耳の上辺りには縮れた髪があるが、全体は薄くほとんど頭皮が見えている。メガネの奥の目からは異様に強い光が発せられていた。分厚い唇からは乱杭歯らんかうばが覗いている。

相当に癖のありそうなおっさんだなど達也は思っ

た。

「山本です」

達也は社長に自己紹介を繰り返した。

「今日から『原点』のカメラマンとして」

「どうしたその傷は」

達也はバイクで転倒したことを説明した。幸いゼフA-1750は無事だった。

「この部屋には入るな」

社長は怒鳴るように言う。

「部屋が汚れる。血を洗い流してこい」

社長が達也を睨にらむ。達也も睨み返す。

「こつちだ」

若い男が達也の前に進み出た。

「野村君。タオル」

若い男に言われると、脅えた顔をしていた受付の女性さかが、タオルを持ってきて達也に渡した。

達也を案内した男は洗面所で羽田野はたの範之と名乗った。羽田野は整った顔つきをした青年だった。長髪の達也と反対に、髪は短く刈りあげていた。

「君、年齢は？」

「二十七っす」

「そうか。ぼくより五つ下なわけだ」

「羽田野さん、若く見えますね。まだ二十五、六といつても通じますよ」

「この仕事じゃそんなこと、何の役にも立たない」

羽田野は壁に寄りかかり、達也が腕の血を洗い流すのを眺めながら言った。

「大丈夫か」

「ええ。倒れたときは足が動かなかったけど、骨は折れていないみたいだ。オレ、バスケやってたから、運動神経はいいほうなんすよ」

達也は鏡で自分の顔を確認する。自分でもほれほれするくらいいい男だと思う。長髪だが、日に焼けた顔は精悍さを感じさせる。ぱっちりとした目は強い光を宿しているが、今は右の頬が腫れている。

鏡の中に、達也を見つめる羽田野の姿が映った。

（この先輩、なかなかいい顔をしてるじゃないか）

達也は羽田野に対して、軽い対抗心が生まれるのを感じた。

（オレと似たタイプの顔をしている）

高校時代、バスケットをやっていたころは、達也も短髪だった。

達也は鏡の中の羽田野を睨んでいた。

「運動神経のいい人間が、銀座四丁目の交差点のど真ん中で転倒するか？」

鏡の中の羽田野が達也に問いかけた。

「バイクのハンドルから両手を放したんですよ。おまけにその状態でトラックと接触した」

「どうしてそんなパフォーマンスをやらかしたんだ」

「空から人が降ってきた」

「空から？」

羽田野が怪訝そうな顔をする。

「そうなんすよ。不思議でしょ」

「見まちがいだよ」

「ちがいますよ。オレはそれをカメラに収めようとして両手を放したんすから」

「何かの錯覚さ」

「絶対にちがう。これは社長にもすぐに報告しなきゃいけないんだけど、なにせ部屋に入るなって怒鳴られ

「たから」

「吉松^{よしまつ}さんは好き嫌いの激しい人間だ。もしかしたら君は失敗したかもしれない」

「吉松って誰ですか」

「社長だよ」

「あの北京原人か」

羽田野は自分の頭に手をあてた。

「北京原人は傑作だ」

顔と腕の血を洗い流した達也は、洋服についた血痕^{けっこん}を丁寧にタオルで拭いていく。だが、血の痕^{あと}はなかなか落ちてくれない。

「羽田野さんもカメラマンなんすか」

「ぼくは記者だ」

「へえ。かつこいいすね」

「なぜ専属になんかなろうとするんだ？ 安い給料でこき使われるのがオチだ」

「フリーで活躍するほどまだ名前が売れてないんでね」

「『原点』 じやたいして活躍の場はないぜ」

「羽田野さんは『原点』ですか」

「ああ」

「オレ、ほんとには『週刊ワード』に行きたいんですよ」

「『週刊ワード』？」

「ええ」

達也が勤務することになったアロー出版は、『原点』、『週刊ワード』、『週刊アロー』という三つの雑誌を出版している。

「でも、今回の採用は『原点』だけだろ」

「そうなんすけどね。オレ、合わないんですよ。『原点』みたいに堅い雑誌は」

「『原点』は政治・社会問題に関する著名人などの論説を掲載する月刊誌で、執筆者はどのような問題に対しても強硬論を主張する人物で占められていた。また、『週刊ワード』は写真週刊誌、『週刊アロー』はマンガ雑誌である。」

「じゃあなんで今回の募集に応募したんだ」

「将を射んと欲すればまず馬を射よってね」

「『原点』は馬か」

「すいません」

達也はポケットからクシを出して頭をなでつけた。

社長室に入ると、吉松と、ミニのビジネススーツに身を包んだ黒縁メガネの女性が達也を待っていた。

「坐れ」

吉松に言われて達也はガラステーブルを挟んで吉松の前、ビジネススーツの女性の隣りに坐る。

「さつきはびつくりしましたよ」

達也は胸ポケットからラークを取り出した。

「空から人が降ってきたんですからね。きっと死にますよ。あの軍服の男」

ラークの箱から一本抜き出す。

「煙草はやめろ！」

吉松が怒鳴った。

達也はきよとした顔で吉松を見る。ラークを胸ポケットに戻す。

「もちろん写真は撮っておきました。落下中は無理だったけど、落ちてからのをね。コンパクトカメラですけど」

「お前はカメラマンのくせにそんなカメラしか持つと

らんのか」

「デジカメが潰れちゃったんですよ。転倒したときに。オレ、いや、僕、バイクで転倒したでしょ。そんときに持ち物みんなばらまっちゃって。コンパクトカメラだけは無事だったんです」

達也は吉松の隣りに坐る女性を見た。

「くそ。あのデジカメ、やつとの思いで買ったのに。エプソンの484万画素。八万もしたんすよ」

女性は冷やかな目で達也を見ている。

吉松は恨みでもあるかのように達也を睨みつけている。

達也は壊れたデジカメのことを恨めしく思った。クレジット会社のカードでキャッシングをして買った達也の唯一の財産だった。おそらくそろそろキャッシングの限度額も近づいているに違いない。友人の保証人になったお陰で背負わされた借金の存在に、金融機関の調査部が気づく頃だ。

「で、ものは相談なんすけどね」

達也は吉松に向かって身を乗り出した。

「オレ、『週刊ワード』にまわしてもらえませんか」

女性が呆れたように口を開ける。

「オレ、『原点』より『ワード』のほうが向いてる気がするんすよ。ほら、空から人が降ってくる事件に遭遇するなんて」

「寝ぼけるんじゃない。空から人が降ってくるわけないだろう」

「ほ、ほんとなんすよ。それをこの目で見たんです。救急車だつて来たし警察だつて来てますよ」

「そいつは往來で倒れたんだ。それをお前は見誤ったんだよ」

「そんなことないですつて」

「いずれにしろお前は『ワード』にはまわさん」

吉松が押搦するような抑揚をつけながらゆっくりと言った。

「お前は『原点』のカメラマンとして採用したんだ」

「ええ。そうなんすけど。でも、とんでもない事件に遭遇しちゃったから。この事件だけでもやらせてくださいよ。『ワード』の応援カメラマンとして」

「『原点』のカメラマンがやめたんだ。その補充としてお前を採った」

「わかってます。でも、人には適性というものがあってですね、オレの適性は『原点』より『ワード』なんすよ」

「『ワード』には充分すぎるほどのカメラマンがいる。それにお前の言うことが本当なら、記者たちもお前が遭遇した事件の取材にすでに出かけているだろう。救急車やパトカーのサイレンの音が鳴り響いていたからな。お前の出る幕はないんだよ」

「でもオレ、目撃者ですよ。この事件の。その目撃者を利用しない手はないでしょう」

「必要なら『ワード』の記者がお前に訊きに來る。そうしたら答えてやればいい。お前が専属になる必要はない」

「でも」

「くだいぞ」

吉松の眼光が強さを増した。達也は口を噤んだ。吉松には人を威圧する力があるようだ。

「お前には都内の神社仏閣の取材をせしめよう」

「神社仏閣う？」

達也は頓狂な声をあげた。

「ちよつと待つてくださいよ。そんな地味な仕事をオレにやらせる気ですか」

「いちいち口答えをするな。気に喰わん奴だな」

「すいません。でも、オレはスクープを撮りたいんですよ。神社仏閣じゃなくて」

「神社仏閣は日本の原点だ」

吉松は胸ポケットから臍脂色の煙草を取り出した。

「あ、マルボロ吸つてんですか。いいすね、やつぱ、赤系の煙草は」

「何なの、赤系の煙草って」

吉松の隣りに坐つて冷やかな目で達也を見ていた女性が口を開いた。

「パッケージの色が赤っぽいってこと。ほらオレ、カ

メラマンだから色にはうるさいの」

「色と味と関係あるのかしら」

「ないかな。それほどには」

達也が嗤う。

「社長。煙草は控えてください。あたし、喘息が出るんです」

吉松は女性の顔を見ながらマルボロを弄もてあそんでいた

が、やがて胸ポケットにしまった。

「天堂さゆり君だ」

吉松が女性を顎で指しながら言った。

天堂さゆりは頭を下げるでもなく達也を見つめている。

「オレ、山本達也。カメラマン志望っす」

頭を下げる。

「志望つて、あなたはすでにカメラマンなんでしょ。

それも優秀な」

「そうでした。オレ、奥ゆかしいタイプだから、つい謙遜しちゃう」

達也は天堂さゆりを見つめた。

不愛想な顔には不釣り合いなほど真つ直ぐに伸びた長い綺麗な髪。その黒い色は濃く、窓から入る太陽光を反射して白く輝く輪を形づくっている。

顔も整っている。背は百六十五センチぐらいでスタイルもいい。メガネを外した顔を見てみたいと達也は思つた。

「彼女は優秀なライターだ。お前はこれの企画が終わるまで彼女の助手としてつけ」

達也は曖昧にお辞儀をした。

「何をすればいいんです？」

「今日はもういいわ。あなた、病院行きなさい。怪我してるんでしょ」

「実は手も足も痛くて」

「頭も打ったんじゃない？」

さゆりは蔑むような笑みを浮かべて達也を見た。達也はさゆりを睨んだ。

「よし、今日は帰れ。そんな体でここにいても足手まといだ」

「わかりました」

達也はさゆりから視線を外してうなずいた。

『『ワード』の取材の人たちが帰ってきたら、オレの言ったことがほんとだってわかりますよ』

「空から人が降ってくるようになったら世も末だ」

「千年紀末ですからね」

達也は立ち上がった。

「明日はどうすればいいですか」

「日本の会社ってのはな、九時に始まることになってんだよ。そして新人は始業十五分前には来てデスク周

りの掃除をするって決まってるんだ」

達也は肩をすくめながら部屋を出ていった。

*

病院へは行かなかった。

どこも骨折はしていないようだ。節々が痛いし擦り傷もあるが、なんとか体を動かすことはできる。バイクに異状もないようだ。

（あの老人はどうして空から降ってきたんだろうか）

青梅街道をゆつくりと走りながら達也は考えた。

達也が老人に気づいたときには、老人はすでに空中を落下中だった。周りには何もない。ただ空が見えるだけだった。

あの老人は、空中に突如として現われた。

どういうことなのだろう。

（あのときオレは）

中央通りを八丁目から一丁目の方角へ進んで、和光の手前まで来たとき、ヘリコプターのプロペラ音が聞こえたような気がして空を見上げた。目に入ったのは落下する人間だった。

（老人は、ヘリから落下したのだろうか）

だが、ヘリコプターは、遙か彼方に見えたのだ。落下中の老人とはまるでかけ離れた位置を飛行中だった。

（あのヘリから落下したのではない）

それは感覚的にわかることだった。老人は、四次元空間からとつぜん青い空、この世界に出現したとは思えなかった。

（そしてあの眼）

老人は落下中は生きていた。達也は落下中の老人と目を合わせたのだ。

（何としてもこの事件のスクープをものにしてやる）

そして有名カメラマンになるのだ。それしか現在の状況を打破する道はない。

経済的窮地に加え、自分の人生そのものが問われているのだと達也は感じていた。

家に着いた。

杉並区荻窪の2Kのアパート。

一階の通路脇にバイクを止めると、達也は鉄階段を上がる。

「山本はん」

下から声をかけられた。

達也はうんざりした。声の主は堀川保吉だ。

町内の住人で、年齢は八十一歳。やや太り気味の体をのそのそさせながら町を徘徊している。

「たまには家に来てくださいよ。面白い小説をまた読んでください」

「そのうち」

「霧島那智と菅谷充はええですな。もちろん荒巻義雄も。あの戦争は日本が勝っていた」

堀川が好むのは架空戦記小説で、その亜空間では第二次世界大戦に勝利するのは日本だった。

「戦争資料館にも行って来ましたよ。パンフレットをお見せしますわ」

堀川と知り合ったのはハムスターのせいだった。

荻窪の街の、地元の人間でも知らないような細い路地の奥まったところに、堀川の家はあった。

住んでいる人間しか入っていないかないうなその細い路地の入口で、達也は一匹のハムスターを見つけた。

最初はねずみかと思ったのだが、白と薄茶色の体の模

様は紛れもないゴールデンハムスターのものであった。

達也はカメラを取りだし、ハムスターに導かれるように路地に入っていた。そして廃屋のような堀川の家を見つけたのだ。テレビもないその家で、堀川はハムスター三百匹を飼っていた。

家の前でたたずんでいた達也に、玄関から出てきた堀川が声をかけて二人は面識ができた。

「そのうちまた話を聞かせてもらいますよ」

達也は堀川を振り切ると自分の部屋の鍵を廻す。

ドアを開ける。

マイケルが暗闇の中から達也を出迎えた。達也はマイケルの頭を撫でる。

電灯のスイッチを押す。

灯りが点かない。

パチパチと何度も押す。やはり電灯は点かない。

(切れたか)

達也は舌打ちをする。

部屋に上がり手探りで洋室に行つて電灯のスイッチを押す。

灯りは点かない。

(おかしいな)

今度は畳の部屋に行く。

やはり灯りは点かない。

(どうしたマイケル。オレの留守中に何かあったのか)

マイケルはニヤアと啼いた。

達也は考え込んだ。そして思い至った。

(もしかしたら)

達也は畳の上に寝転がった。

「くそ！」

一人の部屋で怒鳴った。

(止められたんだ)

電気料金未払いをずいぶん続けている。

達也は飛び起きた。

だんだんと慣れてきた目をこらしながら流しに行き、水道の蛇口を捻る。

水が出てこない。

流しの下収納庫のドアを蹴飛ばした。ドアがへこんだ。

電気も水道も止められた。水道はちょっとやそつと